

---

# クロノセカイ

夢月みぞれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロノセカイ

### 【Nコード】

N6020L

### 【作者名】

夢月みぞれ

### 【あらすじ】

平均的な一般家庭にて育ってきた北村沙織と、その弟の健史。二人は水族館へと向かうためにバスに乗り込んだが、不幸にも事故に巻き込まれてしまう。

幸福な人生を歩んできた二人は、それぞれ大切なモノを失うことになった。

不幸はどこにでも転がっていて、簡単に人間を食い物にする。

これは、そう。それが無知な姉弟に転がってきただけの話。。

田舎と言っても差し支えのないであろうここ歌代市かしろは、人口八万人の、都会から見ればとても小さな街だ。

地下鉄はなく、けれど公共交通機関はこれと言って文句の無いくらいには発展している。

どこかの街のように自動車が盛んであるとか、料亭が立ち並んでいるなんてことは一切無い。

これと言って特徴がないのが、この街の特徴だった。  
それを象徴するような生き方を北村沙織きたむらさおりは送っていた。

見た目はごくごく普通で、悪くもなければ良くもない。

十九歳の女らしく育ってはいるが、胸などの出て欲しい部分はそこまで大きくなく、出て欲しくない部分に関しても、これまた適度に出ていない。

髪は染めることもせず、一応周りに一番多いだろうと踏んだセミロングで揃えている。

学はと言われれば地元の短大に通っていたが、それも残りわずかだ。

一応就職は狙いの企業から内定を貰っている。

このままいけば、四月からは社会人として世に出ていく。

見た目も内面も人生も、これと言って特筆すべき点は、無い。

北村沙織はこのまま平凡に、何の幸とも不幸とも無縁のまま、静かに息を引き取っていく。

そう、思っていたのに。

「たす、け……」

ガソリンが焼ける臭いと、むせ返るような血の臭いと、燻ぶり荒れる黒煙。

周りにそれらが蔓延する中、沙織は身動きできないまま呻き声を上げていた。

しかしそれは自身が助かりたいが為のモノではなく。

唯一血を分けた姉弟である、自分より幼い弟の命を乞うての声明だった。

血の涙を両の眼から流しながらもなお叫び続ける。

「お願い、たすけて

」

弟を助けようと声を枯らすも、彼女にも限界が訪れた。

極限にまで追い込まれていた意識が断絶しはじめたのだ。

ちか、ちかと脳の中で何かが切れかかる。

何としても弟を助けねばならぬのに、無力な自分は何も出来ないまま、こうして闇に落ちていってしまう。

その齒痒さを脳裏に焼き付けたまま、北村沙織は深く昏い世界へと誘われた。

まるで滝のように流れる紅い雫にも、最後まで気がつかないまま。

クロノセカイ

気がつくところには、見慣れない世界が広がっていた。

前を見ても、横を見ても、起き上がってみても、どこを見ても真

っ暗だ。

何が起きているのか　　黒髪の女は戦々恐々としながら、そつと自分の目に手を触れてみた。

「  
」

何かが巻かれている。

手触りからして、これは包帯ではないだろうか。

そこまで思案した彼女の耳に、聞き覚えのない声が聞こえてきた。

「北村さん！？」

誰かは知らないが、なぜそこまで驚くのか。

疑問はしかし、その女声の続きを聞いたことで頭から吹き飛んだ。

「先生、北村さんが目を覚ましました！」

「本当か」

先生、と言う単語に一瞬思考が凍結する。

そう言えば、先ほどからここには何かしらの刺激臭がしている。

嗅ぎ慣れているような、そうでないような。

これは、確か。

北村沙織が匂いの正体に気がついた時には、何者かに手首を掴まれている。

「……よし、脈は安定しているな。おい君、足立先生を呼んできてくれ」

「はい」

慌ただしく駆けていく一つの足音。

叫びだしたい一心を抑えながら、沙織は注意深く周りの状況を把握しようとする。

今となつては、聴覚と嗅覚、それに触覚だけが世界の情報を得る手段だ。

それらをフルに活用し、一つの結論を導き出した。

「消毒の匂い……先生……ここは 病院？」

独白はしかし、先生と呼ばれていた者にも伝わっていた。

「そう、ここは病院だ。君は、もう一週間も目を覚まさなかったんだよ」

「一週間……」

ゆっくりと、外から入ってくる情報を脳内で咀嚼する。

現在、どうやら自分は病院にいるらしい。

しかも一週間も意識を失っていたのだとか。

にわかには信じがたいが、眠っている時に外の世界を知る術はない。

問題は……なぜ、自分がここにいるか、だ。

記憶をさかのぼってみる。

私は確か 。

「わたし……わたしは……」

早まる鼓動を落ち着かせながら、妙に痛むこめかみを押さえながら、北村沙織は記憶の糸を辿っていく。

そして、一つの閃きが、頭の中で弾けた。

「そう、そうだ。健史」

健史　北村健史は、沙織にとって掛け替えの無い、たった一人の弟だ。

その存在を思い出した瞬間、あの日の記憶がフラッシュバックした。

「あ　　ああ」

溢れ出す地獄絵図。

今は外の景色さえまともに見えていないが、あの時の風景が脳内でまざまざと蘇ってくる。

何かがぶつかる音。

轟音の後に続いた悲鳴の嵐。

焦げ臭さと血の臭いが入り混じった、体感したことのない恐怖。

そうだ　　あの日は確か、弟にねだられて水族館に行く途中だった。

バスに乗り、電車に乗って目的地を目指していた。

沙織よりも五つ年下の健史は、年頃の男の子と言った感じではしやいでいたのを思い出す。

まだ十を越えたばかりの少年は、大好きなイルカに会えると、前日からずっと目を輝かしていた姿が目には焼き付いている。

だのに、バスに乗り込んで十分が経とうとしていた頃、悲劇が起きたのだ。

はつきりとは思いだせないが、確か物凄い衝撃と音が全身を襲ったあと、車体が大きく転覆していた。

ここくらいから視界がゼロになった気がする。

そこからは、ただひたすらに弟の心配をし続けていた  
こ  
れが、いま彼女に思い出せる全てだ。

その後どうなったかは微塵も知り得ない。

これだけの事を思い出して、沙織の重かった口がようやく動き始めた。

「あの、すみません。私の弟を知りませんか？」

「弟……？ あ、ああ。私は君の担当医じゃないからわからない。

詳しいことは担当医の足立先生あたちに聞いてみてくれ」

「あ、はい」

前髪を風が撫でる。

それは誰かが移動した際に起きた、小さな横風だった。

自分がかまわずいことを聞いてしまったのか、それとも用事があったのかは定かでないが、すぐ傍にいたであろう先生が立ち去ったようだ。

それも何故か急ぎ足で。

目の見えなくなった沙織は、早速周りにアンテナを巡らし、推測を立てながら状況を想像していた。

弟も心配だが、今は自分の体でさえどうなっているかわからない。そんな焦りから、彼女は出来ることはなんでもやっていこうと意志を固めた。

自分が弟を守るんだと息巻いて。

しかしあれだけ大きな事故だったのだ。

最悪歩けなくなっているかもしれない、などと考えつつ、誰もいなくなつた病室で、沙織は一人担当医を待つのだった。



「大丈夫だよ、君の弟さんは」  
「そうですか……」

この台詞を聞いて、どれだけ心が救われたことだろう。

あれからやってきた医者には温厚な性格の持ち主のようで、喋り方はゆつくりと丁寧であり、沙織はすぐにこの足立と言う先生は、五十前後の人の良さそうな白髪頭のオジサン、と想像した。

まさか痩せ細った、黒縁メガネをかけているような先生ではあるまい。

大きく温かな掌がそれを証明している。

そう思い込んで、沙織は安堵の息を漏らした。

「良かったぁ……本当に」

「……そう、ですね」

「お伺いしたいんですけど、いいですか？」

「ん？ あ、ああ。なんでも聞いてください」

「それじゃあお言葉に甘えて。……どうして私は運ばれてきたんですか？」

足立と名乗った医者、息を飲む音が聞こえてきた。

まさか記憶喪失ではあるまいな、と言う医者の心理が起こさせた行為だったが、まさかそんな考えをされているとは露にも思っていない沙織は、小さく首をかしげる。

「どうかしました？」

「い、いや。……ええと、君はだね、交差点内で事故に逢ったんだ。居眠り運転だったトラックが、君たちの乗っていたバスに横腹から突っ込んでね。」

バスは大破。大勢の乗客が怪我を負ったんだ。その内の一人が、北村沙織さん　貴方です」

いま聞き及んだ話は、大体沙織の思い出した通りの筋書きだった。しかしあの強烈な衝撃が、トラックの追突だったとは夢想だになかったが。

「負傷者はどれくらいです？」

「二十……名ですね。しかしどうしてそんなことを？」

「いえ、興味本位からです。今までこんなこと、一度として無かったので」

そう、とりわけ沙織は“入院”も“事故”も初めてのこと。

自分がまさかこんな大事件に巻き込まれるなど、思ってもみなかった。

いつもニュースで見ていることがこうして現実に起きているのだと、やっと実感することが出来たのが少しばかり嬉しいような気がする。

事故は確かに怖かったし、こうして怪我までしてしまったが、これはこれで良い経験になった。そう思い込むことで、一刻も早くこの惨劇の記憶を消し去ろうとしているのも事実ではあるのだが。

「それより、どうして私の目には包帯が？」

いよいよ本題に切り込むことにした沙織。

事故の話は本当らしく、それに巻き込まれて自分も怪我を負ったのだとは理解できる。

しかし自身の状態は一切不明だ。

ベッドから降りる気力もなければ、両目を覆っている包帯を自分でとる勇気もない。

もしかしたら辛い現実から逃げたいがために、こうして自分から

調べようとしているのではないだろうか。

答えは YESだ。

北村沙織は、心底自分自身に自信が持てない。

今まで平平凡凡に暮らしてきた彼女にとって、今回の出来事はあまりにも強烈すぎた。

感覚としては両足もくつついているし、両腕だって健在のはず。

だがもし違ったらどうしたらいいのか。

そう考えると怖くてたまらない。

だからこそ、こうして人に尋ねる。

こうすれば、最悪、足がないだの腕がないだの言われても受け入れることが出来る。

他人が諭してくれば、それなりに応じれるはずだ。

それは、恐怖を味わった者にしか見出せない、ある意味最善の逃げ道なのだ。

責任転嫁と言えば聞こえは悪いが、とにかく、自分で崖を落ちるより、他人と一緒にならまだ少しは安心出来る。

困窮した様子を医師も悟ったのか、足立担当医はゆっくりとその腰を上げると、その持前の優しい声で、

「北村さん、貴方はさっき目覚めたばかりで色々と負担が大きいでしょう。病状に関するお話は、また明日にしましょう」

ではお大事に、と一声かけて部屋を出ていく医者。

ぱたん、とドアの閉まる音が聞こえると、なるほど、疲れがどつと押し寄せてきた。

自分では普段通りにしているつもりでも、相当気を張り詰めていたようだ。

小さくため息をつき、そのままベッドに身を預ける。

相変わらずの闇を目前に感じながら、北村沙織は頭から布団を被った。

どこまでも広がる深淵から逃げるかのように。

夜の病院ほど不気味なモノは無い。

とりわけ入院経験のない沙織にとって今夜は、目が見えないことも手伝って心胆凍えたらしめる夜となっていた。

視覚を失っている現状、聴覚だけにしか頼れないのは仕方のないこととはいえ、それが恐怖心を二倍にも三倍にも増幅させているのは間違いのような事実だ。

ちよつとした風音に怯え、どこからともなくやってきては去っていく足音に身を震わせる。

静まり返った院内と、二時間ほど前に消灯時間を告げにやってきたナースのセリフから、今が深夜だと推測できた。

これほどにまで病院が怖いものだとはいえ、沙織は遠き日の会話を脳裏に浮かべた。

『病院って怖いところよ』

それは、健康そのものの体を嘆いていた、幼き日の会話だ。

どうしても小学校の年間行事であるマラソン大会が嫌で、体が弱いことを理由によく病院に通っていた女友達に、沙織は羨ましいという言葉を発した。

そして帰ってきたセリフがコレだった。

病院は怖いところ。

注射も怖いけど、それ以上に怖いわ、と言っていたのを思い出す。当時の自分は、マラソン大会をはじめ激しい運動も、楽しくない

水泳も、きついだけの体力測定もやらなくていいのだから、と羨望の眼差しでその友達を見ていた。

病気にもならず、大きな怪我もしなかった沙織は、病院との縁が全くと云っていいほどになく、そんな彼女だからこそ病院に米粒ほどの畏れも抱かない。

今鑑みてみれば申し訳なさが入り込めてくる。

いくら畏れを知らないとは言え、相手の気持ちを少しでも酌むべきだった。

この怖い思いはきつと、あの時の罰なんだ、と北村沙織は身を縮こめた。

「……………」

布団を頭から被さり、世界から精神を離脱しようとするも、音だけが異常に耳に付く。

眠気はやってきてくれるところか、逆手に取ったように無駄に神経が研ぎ澄まされていく。

これでは眠れない。

しかし、だったらどうすればいいと言うのか。

枕元に伸びてきているナースコールのスイッチを押せと？

それとも、暗闇の中を、なんの助けもなく歩みながら夜風にでも当たってこいと？

……否、いま彼女に出来ることと言えば、こうして身を丸めながらひたすら夜中を耐えきること。

その一点のみだ。

「はあ」

布団の中で深呼吸をする。

きつと自分は疲れすぎて眠れないだけ。

体はちゃんと疲れているんだから、目を閉じていればそのうち眠れるはずだ。

そう信じ、今度こそ眠りにつこうとした、その時。

「お姉ちゃん」

ふと、聞き慣れ親しんだ声が、耳の中に入ってきた。  
心音が一気に跳ね上がる。

まさか                  そんな。

「さおりお姉ちゃん」

聞き間違いかと思った。

いや、そう思おうとした。

だが繰り返されたセリフは、間違えようもないほどに彼女の胸の中に残っているモノだった。

これは、忘れもしない、大事な弟の声ではないか                  。

「健史……？」

布団を剥いで体を起こす。

静かすぎるセカイの音が、耳に痛みをもたらしている。

しかし今の彼女には、そんなことを気にする余裕すらない。  
全神経を来客へと向ける。

「健史なの？」

静かに、されどはつきりとした口調で問い質す。  
声は、それに応じた。

「うん」

幼げな声だけが耳に届く。

姿が見られないのが残念だが、沙織は安堵と喜びで、そんな些事は二の次だと言わんばかりに喋りはじめた。

「無事だったのね。怪我はしなかった？」

「うん」

「ああ……良かった。本当に良かった……」

思わず涙ぐんでしまった。

今は闇しか見えない両目だが、この包帯の向こう側に佇むであろう我が弟はきつと、大した怪我もなく笑顔をこちらに向けているのだろう。

そう思うだけで胸がいつぱいになった。

「ゴメンね。お姉ちゃん、ちょっと怪我しちゃったみたい。だから退院できるまで少し時間がかっちゃうけど……。お姉ちゃんが傍にいないでも、ちゃんとお利口さんにしておくのよ？」

「うん」

「わかればよし。さ、もっと近くに寄って」

両手を広げて招き寄せようとする。

だがいくら待っても、その手には何の感触も得られなかった。不可思議に思った沙織は、戸惑いの呟きを洩らす。

「健史……？」

そんな姉に向かって弟が放った言葉は、あまりにも理解を離れたモノだった。

「ごめんなさい、さおりお姉ちゃん」

悲しそうな声で、そう謝罪する可愛い弟。  
もちろん沙織は困惑した。

目が見えないことが焦る気持ちを煽っている。

「ど、どうしたの」

「ごめんなさい……」

尋ねても返ってくる言葉は同じ。

“ごめんなさい”

一体、健史は何を謝っているのだろうか。  
核心を得るところか表情さえ見えぬ沙織には、相手の胸中を推し量ることさえ出来ない。

そんな状況でまともな推測など出来るはずもなく、ただ目前にいるはずの健史が発するであろう次の言葉を待つしかなかった。

そうして、何時分が経っただろうか。

「健史……？」

ふと、人の気配が無くなったのを感じて、沙織が闇に向けて言葉を投げる。

しかし静謐の中で返事が返ってくる雰囲気は無く、ただ息苦しく重々しい空気が漂っているだけだった。

足音も無ければ、扉を開けた音も無かった。

もしかしたらまだ自分の周りのどこかにいるかもしれない。



そんな淡い期待を持つてはみたものの、それが単なる気休めなの  
だとは、誰よりも彼女が理解していた。  
それでも名前を呼んでみる。

「健史」

風の音さえ聞こえない、真つ暗闇の中。  
虚空を彷徨う沙織の手だけが、唯一部屋の空気を乱している。

「ん……」

気だるい体に、混沌としている思考。  
無臭の夜とは違った、香ばしい香りのする朝。  
だが黒一色に支配されている沙織の視界では、昼夜を判別するこ  
とは不可能に近い。

そんな彼女が朝だと判断したのは、たったいま嗅いだ朝の香りと、  
周囲の喧噪、それに頬に当たる暖かい何かを感じてのことだった。

ぐらつく頭を右手で支えながら体を起こす。

布団を頭からかぶって睡眠に入っただけなのだが、朝の日光を肌  
で感じる事が出来たと言うことは即ち、頭が布団から出ていたこ  
とになる。

……あれからなかなか寝付けなかったせいだろう。  
痛む頭の中を落ち着かせるように、浅くため息をついた。

「健史……」

昨日のアレは一体なんだっただろうか。

わざわざ自分の所を訪ねておきながら、ごめんなさいと謝るばかりで会話にすらならなかった、弟の存在。

あれだけの大事故を経たのにも関わらず無事に再開できたというのに、どうして喜びではなく謝罪の言葉を口にしたのか。

考えても答えが見えてこない。

まるで出口の見えてこない迷宮の中に足を踏み入れたようで、北村沙織は起床から二度目のため息をついた。

今度のため息は、深く長い。

頭痛が、ひとしお彼女を苦しめた。

「それじゃあ北村さん、貴方の現在の症状を説明します」

「お願いします」

運ばれてきた朝食を看護師さんに食べさせてもらうと言う、恥ずかしいにも程がある状況から二時間が経とうとしていた頃。

昼の気配が迫ってくる最中、昨日沙織の担当医だと言っていた先生がやってきた。

相変わらずゆっくりかつ丁寧な喋り方で話を進めていく足立先生。妙に安心感があるのは、この口調のせいなのか声のせいなのか。とにかくその安心感のおかげで沙織は緊張することもなく話を聞く耳を持つことが出来た。

「まずおさらいですが。北村さん、貴方は約一週間前、バスに乗っていて事故にあった。ここまでは良いですね？」

「はい」

「事故にあった時、自分自身で怪我などは確認されましたか？」

「いいえ。でも目は事故にあった直後くらいから見えてないです」

「そうですか。では、まずその目について説明しましょう。」

症状から言えば、貴方が視力を失ったのは、事故時に両目を強く打ったのが原因だと思われます。外部からの強力な衝撃により眼球が圧迫され、内出血と筋断裂、それに神経もズダズダです。これを治そうとするのは極めて難しく……現代医学では治しきれないとかお答えできません」

「……………」

そんな、予感はしていた。

あれだけの大きな事故だったのだ。

命があっただけでも僥倖だと思うのが筋と言うモノではないか。

「力不足を痛感します。すみません……………」

「いいえ。それで？ 他の部分はどうなんですか？」

まさかこれ以上絶望はあるまいと沙織は希いながら、続きを促す。

「視力以外にダメージが大きかったのは、左足です。事故現場で意識を失ったのも、ここからの多量出血が原因とみられます」

「多量            出血？」

「はい。これも申し上げにくいのですが……、トラックと衝突してバスが転倒した際、ガラスが脚に刺さっていました。」

血管の方は手術で問題なく治療出来たのですが、深く傷ついた神経までは……………」

「……………」

これ以上は言うに耐えないとばかりに言葉を切る担当医。

対する沙織は、脳内でリフレインする今の説明を、理解できない

とばかりに首を横に振る。

それは理解できないのではなく、理解したくないが為の現実逃避であつたが、そうなるのも無理はなかつた。

うら若き乙女ともすれば、人生は今から花開いていくものだ。

どうしてこんなところで躓けるものか          その、あまりの不

条理に、沙織は戦慄いた。

これから一生、目が見えない。

これから一生、左足も動かない。

こんなにも傷ついた自分を、どうしてまともな殿方が迎えてくれるのか。

恋もまだ、もちろんキスもまだだ。

愛しい夫の顔も、いつかこの両手に抱くはずだつた我が子の顔も見ることには叶わない。

運命はそれでも飽き足らず、どうして足の自由まで奪つてしまつたのか。

目が見えず、片足が動かないということはつまり、車椅子の生活を          それも、外に出るには自分の代わりに目となってくれるお付きまでもが必要になるということ。

そんな不自由極まりない生活を、これから死ぬまで続けていかなければならないとは。

これが慟哭せずにいられようか。

まだ両足の自由が無くなる方がマシだつた、まだ目だけが見えなくなるだけの方が良かった、まだ目覚めなかつた方が良かった

！

だが彼女は泣き叫ぶ一歩手前で堪え、掠れた声を以て、眼前にいるであろう白衣の男性に向かって問い質した。

「わたしの話はもういい。          それより、た、健史は？」

うつたえる姿はやはり痛々しい。

足立医師も、そんな彼女の状態を目前にして、事実を事実通りに話すことが正しいことなのかわからなくなっていた。

明らかに今の沙織は取り乱している。

ここで真実を述べたとしたら、間違いなく卒倒することだろう。

医師として、というよりも、人間としてそれは躊躇われた。

「健史君は……今はまだ、安静にしています」

咄嗟に出た嘘も、それが嘘だとバレなければ真実となる。

実際、足立のセリフを聞いた沙織は、深い安堵の吐息とともに頭を垂れた。

患者をだますのは心苦しかったが、それで生きる気力を持ち直してくれるのならばどんな嘘でも吐くべきだ。

それは、二十年近く医者をやってきた足立の、経験をもとに導いた見解だった。

「良かった……」

「どうやら長話が過ぎましたね。今日はもうお疲れでしょう。ここら辺でやめておきましょうか」

逃げるように立ち去ろうとする足立。

その背に、沙織が声をかける。

「先生。健史にはいつ会えますか？」

ずきり、と良心が痛んだ。

足立はその痛みから逃れようと、急いで部屋から出ようとしたが、どうしても足が動かない。

まるで両足が床に吸いついているかのよう。

逃げられない

そう観念して、足立は回答に悩んだ。

このままこの部屋から逃げ出すことが出来れば、どれだけ気が楽になることが。

しかし生粋の医者である足立は、ここぞと言うところで患者から目を背けることができなくなってしまった。

だからと言うわけではないが、爆発寸前の心臓を整え、思考をまとめて回答を探る。

いま彼女が期待している答えは、果たしてなんなのか。

時間にして二十秒も経たない時間の中で、足立は一つの答えを口にした。

「……ICUって言う治療室から出たら、かな」

ICUと言うのは集中治療室のことで、大抵は家族にしか入室が認められていない。

家族とて、ひとたび患者の容体が悪化すれば外へと弾き出されてしまう。

足立が思いついた言い訳は、まさにこのICUを用いてのモノだった。

集中治療室なら、万が一沙織が訪ねてきても追い返す口実がいくらでも作れる。

看護師連中に相槌を頼んでおけば問題はないだろう。

もはや子供の言い訳ともとれる苦しい弁明だったが、聞き手はどうやら納得したようだった。

「どれくらいかかりそうですか？」

「さあ……それこそ神のみぞ知る、ってやつですからね」

この時、足立は心から沙織の目が見えないことに感謝した。

今の自分の顔は、間違いなく引きつった笑みを張り付けているこ

とだろう。

もし沙織の目が見えていたとしたら、いつ嘘が露見してもおかしくない状況だ。

今度こそ背徳心が足立医師の心の深部まで蝕み、堪えのきかなくなった精神が動かなくなっただけの両の足を稼働させる。

「それでは、また」

振り向くこともなく、足立はようやく動き出した自分の足に運ばれるように部屋を後にした。

輝かしい夕焼けを前に、北村沙織は立ち尽くしていた。

壁伝いにやってきた病院の屋上には、都合の良いことに猫一匹さえもいなかった。

途中、何度も腕や足を打ちつけたせいで、あちこちに鈍痛が走っている。

それでも本人は痛がる様子もなく、手すりに手を置いたまま、ただ茫然と立ち尽くしていた。

風が穏やかに流動しているのが肌で感じられる。

街は活気に溢れているようで、ざわめきがここまで伝わってきている。

世界は今日もこんなにも普通で、こんなにも普遍的だ。

それなのに、どうして私は今、こんなにも絶望的なのだろうか。

どうして屋上にやってきてしまったのかさえわからない。

ただ、医師の話聞いてからと言うものの、心がざわめいて落ちて着かなかった。

そして気がつけばココにいた。

感覚の無い左足が、やけに腹ただしく感じる。

沙織は今、怒りとも、悲しみとも、諦めともとれる、自分でもよくわからない感情に翻弄されている。

昨日、両親がやってきた。

もちろん沙織に対し、精一杯の気遣いと優しさを持ってきてくれた。

母親は涙まで流し、生きていて良かったと言った。

しかし沙織が感じたのは、どうしようもないほどの虚無感で、決して喜ばしいモノではない。

まさか両親の目の前でそんなことは口にしていないが、心の中では両親たちが帰るまでずっとそう思い続けていた。

そして今日、気がつけばここまで来ていた。

無意識下にあったとは言え、ここに来たのは間違いだ。

医者や看護師たちの言う通り、沙織は重病人であり、安静にしていなくてはならない。

にも関わらず、ここへやってきてしまった理由は明らかではない。明らかではないが、不穏ともとれる、一つの予感がある。

「……………」

フェンスから身を乗り出して下を向くと、一瞬、吸いこまれそうになった。

ごう、と風のうねる音を聞いた瞬間、身体が軽くなった。

まるで奈落の底から、新しい死人<sup>しひと</sup>を迎え入れる魂たちが、そちら側に引きずり込もうとしていたかのよう。



「は、っ  
」

“死”という概念を体中で感じた沙織は戦慄した。

とっさにフェンスの手すりから離れた彼女は、機能しない左足のせいで踏ん張りがきかず、そのまま尻もちをついてしまった。崩れ落ちた彼女の、その背には多量の冷や汗が流れている。

「はっ、はっ、はっ」

リズムカルに、しかし異常に行われる呼吸。

それは、あまりにも高速で機能し続ける心臓のせいだった。今の出来事のせいで、体が“生”を求めて躍起になっている。

「う……うう……」

精神が安定しだした頃、今度は目に鋭い痛みが走った。

ずきん、ずきんと脈打つように走る痛み。

そっと包帯に触れると、そこは湿っていた。

「う、うああ……ッ」

堰を切ったように溢れ出す涙。

痛みに耐えながら嗚咽し、握った拳でコンクリート造りの床を叩く。

どこもかしこも痛みだらけ。

だが沙織からしてみれば、この痛みこそが生きている実感なのだとばかりに、痛みを肯定しながらひたすら床を叩いた。

そんな、他所からみれば精神障害者のような行為も、好しとする人がいた。

「泣きたい時は泣けば良いんだよ」

その声に、思わず全てを忘れた。

いま自分がしていたことも、考えていたことも。

涙を流すことさえ忘れた。

それだけ、その声には意識を持っていかれた。

聞き間違いなど起きない、その声紋に。

「健史……？」

「さおりお姉ちゃんにはさ、お父さんもお母さんもいるんだし」

「どうし」

「僕からの最期のお願いだよ。泣いても、辛くても、苦しくても

生き抜いて」

「何を言って、」

有無を言わさぬ弟の氣勢に戸惑いながらも、なんとか会話を成り立たせようと沙織は試みたが……それは徒労なのだと、否応に理解した。

本当に最後となる一言が、彼女に止めを刺したからだ。

「僕はもう死んじゃったから。……だから、さおりお姉ちゃんは

」

“ 生きて ”

大気に溶けていくその愛しい声が、空洞となった沙織のココロに満ちていく。

摩訶不思議な現象に驚くこともなく、止まっていた涙が、またも溢れてきた。

涙は痛みを伴うことなく流れていく。

真っ暗な視界は相変わらずだが、暖かな何かが沙織の全身を覆っているように感じる。

こんなにも　こんなにも悲しいのに。

こんなにも、安心する。

「あ　　ああ………」

手を伸ばす。

その手に温もりなど感じられるはずもないが、それでも沙織は手を伸ばした。

いかないで、とこねてみた。

帰ってきて、と懇願した。

一緒に、と幻想した。

返事はひとつとして返ってこない。

……いや、それはわかりきっていたことだ。

死んでいたのにも関わらず、彼女の目の前に現われていたダレか。その異常さは彼女にも十二分に理解できている。

幽霊など信じていないが、それでもこの不思議にはそれ以上の説明が出来ない。

「健史……ごめん……ごめんね」

北村沙織は、頭を垂れ、飽くまで泣いた。

「なんと言ったらいいか……」  
「いえ、気にしてませんから」

ついに退院の日を迎えた、今日。

送り出しをしてくれるはずの担当医さんが、それはもう、仕事で何かしら大失敗をしでかした新人のような顔つきでやってきた。

「本当、申し訳ない！」

「まあまあ。足立さん、今日は私にとっておめでたい日なんですから、そんな怖い顔してないで、もっと笑ってくださいよ」

足立さんと言うのは、私の担当医をしてくれていた人だ。  
どうやら私に嘘をついたことをいまだに引きずっているらしい。

もう半年は経とうとしているのに。

足立さんは普段は物腰柔らかかな人なんだけど、自分にやましいことがあったり、何か悪いと思うところがあると性格が百八十度変わってしまうのである。

これは入院中知ったことなのだけれど、どうやら足立さんの奥さんは相当な力カア天下思想な人で、足立さんのこの性格も奥さんの影響がかなり強いらしい。

尻に敷かれっぱなしなんだよ、と看護師さんから聞かされた時は、本気で飲んでいた水を噴き出したくらいだ。

だって　ねえ？

目が見えなくてもわかるくらいの人格者がまさか、奥さんの尻に敷かれてるなんて誰も思わないでしょ。

「お世話になりました」

「いえ……こちらこそ至りませんで……」

私の両親の挨拶の返しに、明らかに沈んだ声で応えてくれた足立さん。

どうやら、とーっても責任感じているらしい。

不慮の事故なんだからどうしようもないのに。

……そう思いつつも、先生を激励する意味も込めてここは毒舌で。

「足立先生、もっと修行が必要だね」

いつもは足立さんと呼んでいるのだけれど、わざと先生をくつつけた。

足立さん本人は、足立先生とか足立医師と呼ばれるのがあまり好きじゃないらしい。

医者なのに変わった人だな、と思いつつも、その考え方に少し共感してしまった。

つまるところ、この人はどこまでも“良い人”なんだ。

先生なんて大それたものじゃない、と答えてくれたあの日のセリフを思い出す。

“私は生涯、勉強し続ける、ダメな医者だからね”

「それじゃあ行きます」

「足立さん、元気でね」

「ああ。北村さんも、ね」

ロビーでのお別れは簡素で、でも、とっても意味のあるモノだった。

私はここから再出発する。

足立さんはそれを手助けしてくれた人であり、命の恩人でもある。もつと盛大にお別れ会でもやりたいことはやりたい。

でも 私と足立さんは、患者と医者だ。その領分を忘れてはいけない。

医者は患者を助けるために尽力する。

患者は医者に助けてもらうために尽力する。

お互いは病に、そして怪我に対してともに闘った仲間だ。

その轍は消えはしない。

だからこそ、別れの言葉など不要。

医者は笑顔で見送り、患者は笑顔で去る。

それだけで十分なのだ。

「バイバイ」

こうして、私の短くも長く感じた入院生活は、幕を閉じた。

「健史」

仄かに香る線香の匂い。

両親に車イスを押して来てもらい、ようやく墓前に立つことが出来た。

あの日 事故にあった私と健史は、運命を別った。

私は視力を失い、左足不随となるも、こうして命は取り留めた。

しかし健史は、その命までも失ってしまった。

私と健史にはなんの差があったのか 今でも答えは見つけ

られないでいる。

だけど、昔から良く言うセリフがある。

“ 良い人ほど早く逝ってしまう ”

このセリフを引用すると、つまり私は良い人ではない、ってことになる。

まあ実際、健史は優等生で動物好きな、あらかさまに将来有望株だった。

それに対し、私はドジで間も悪く、勉強もそこそこにしか出来ない。

天秤をかけるとしたら、間違いなく運命は私を選ぶだろう。

…… 良い人じゃない、から。

健史の幽霊事件のことは、誰にも話していない。

先生や友達はもちろんのこと、両親にだって話をしてないし、これからもする気は全くない。

別に話しても減るモノでもないんだけど、なんというか……この件に関しては、姉と弟だけの秘密、ってことにしておきたいのだ。

幼くして逝ってしまった健史とは、姉弟として秘密の共有化するモノをしたことがない。

普通、姉弟間にしかない、隠し事みたいなのがあると私は勝手に思っている。

全国津々浦々の姉弟なら一度は経験あるはずだ。

ま、以上の理由で話さない。

もうちょい年取ったら、そのうち話してしまうかもしれないけど。

「健史……私、約束守るよ」

あの日、絶望の只中で希望をくれた、我が弟。

そんな、死してなお私に会いに来てくれた弟を、なぜ失望させることが出来ようか。

「精一杯生きるよ。だから、もうちょっと待っててね」

目は見えない。

足も不自由だ。

結婚も勝算は限りなく低いだろう。

それでも、私は生きていこう。

生きて、生きて、生き抜いて

その最果てに命を落とすこ

とがあれば、その時こそ、誇って健史に逢いに行ける。

だからその時が来るまで見守っていてほしい。

「そろそろ行くわよー？」

「はい」

下からお母さんの声が聞こえてきた。

どうやら面会はここまでらしい。

「じゃあね、健史」

真っ暗な生活にも慣れてきた、十九の秋。

私は青空であるう空の下で、愛しい弟と別れを告げた。

(了)



（後書き）

二作目の投稿になります、夢月みぞれです。

今回はありふれた題材を使おう、と言うことで『交通事故』を取り上げて書きました。

もっと真に迫った作品を書くべきだと思ったのですが、どうしても使いたいネタがありこのような形になりました。脳って面白いですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6020/>

---

クロノセカイ

2010年11月18日02時42分発行